

「エジプトは、ギリシアの二の舞にはならない」

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長 長沢 栄治
(前信州イスラーム世界勉強会代表)

〔夏へ向かう風景〕



図5 火炎樹(ホウオウボク)

5月も半ばを過ぎ、周辺の街路や庭の火炎樹（ホウオウボク）の花が、見事な満開となった。可憐で涼し気なジャカランダの花にとって代わり、その強烈な赤色の花冠が本格的な夏の到来を告げている〔注1〕。季節の変化といえ、こちらに来て初めてカイロの市街地を離れ、麦秋の農村風景を目にすることができた。ナイル・デルタの中心都市マンスーラで、日本の学術政策や奨学金制度を説明する日帰りの仕事が入ったからである。日本でも最近、米の価格の高騰が問題になっているが、エジプト政府もウクラ

イナ危機以降、小麦の作付け面積の拡大に努めている。小麦の収穫風景を見て、そんな報道を思い出した。

さて、この10年ほどエジプトでは、各地で高速道路や橋梁の建設が急速に進んでいる。新しい道路が毎月どころか、毎日できている気がするとは、友人の運転手の大げさな表現である。エジプトとアレキサンドリアを結ぶ沙漠の高速道路は、片道5車線、加えて外側にトラック用の2車線、合わせて7車線である。この「砂漠道路」と並んでかつて「農業道路」と言われたデルタの道路も、高速道路への切り替え工事が進んでいる。カイロを出て、ベンハー（かつて人類学者の故大塚和夫さんがフィールドワークをしていた）郊外からマンスーラに向かう高速道路も半分までは



図6 麦秋

完成しているようだ。しかし、この片道 4 車線の一番左の「追い越し車線」を何と逆走してくるバイクや自動車がいる。それは交通違反ではなく、当局によって走行が許可されているのであろう。「上り」の道路は運河沿いの旧道のままであり、声の大きな一部市民の要求に屈して、この「下り」の高速道路の逆走が許されているのかもしれない。しかし、デルタでは冬季の早朝などに深い霧が出る



図7 ナイルデルタの夕日

ことが多く、危険極まりない。

その一方、車窓に映る光景は麦秋をはじめとして、至極のどこである。行きの朝も帰りの夕も、デルタのこの地域の特産なのか、ビニール袋に入った大型のパンが露店で売ら

れているのが珍しかった。帰りの旧道では、ピエロ帽子のように赤い人参の房を頭に乘せて売っているおばさんたちの姿が見えた。マンスーラ人参という名産品らしい。

現政府が進めている急速なインフラ建設の波の中でも、変わらない風景はある。そのときはデジャヴと思ったが、帰ってから地図で確認すると、それは 30 年ほど前によく通ったミート・ガムル市の郊外の光景だった。窓のない 3 階か 4 階建ての住居の赤レンガの壁に囲まれた広場が、その道路わきにあった。いかにも場末といった荒れ果てた雰囲気漂わせる、なぜか記憶に残る風景だったが、ほとんど変化がないように見えた。当時、同市を訪れた目的は、労働運動の指導者と会うことだった。今は亡き老活動家の面影を偲んだ〔注 2〕。

〔カイロの街中に地下鉄で向かう〕

事務所の引き継ぎの仕事に追われて、カイロの街中を歩く時間が取れない日々が続いた。そんな中、出版社を経営している友人に呼びだされて、ようやくダウNTOWNに出る口実を作った。街中を少し歩こうと思い、地下鉄に乗った。事務所があるザマーレク地区にも地下鉄（3 号線）が通ったので街中に出るのが便利になった〔注 3〕。

駅では、東京のパスモのような Cash Wallet（カールト・マフハザ）を買った。窓口で尋ねると事務所から係の人が出てきて親切に自動販売機での購入手続きを助けてくれた。車両に乗り込むと今度は、背の高い青年からきれいな英語で声をかけられ、席を譲ってもらった。気がつく「女性とお年寄りに・・・」などと車内放送が流れている。

私も 40 年以上前にカイロに住んでいた頃、バスで若い女性に席を譲ったことがある。すると座った彼女は口もきかずに私のカバンをひったくった。驚いたが、それは御礼のつもりであったのだろう。当時もまたその後はさらにひどく痴漢が横行するカイロのバスであるが、空いている車内ではそれなりの道徳的秩序があった。

以前に地下鉄に乗りはじめた頃、次の駅、あるいはその次の駅で降りる乗客のために

相互で声をかけ立つ場所を譲りあうルールがあるのを知った。それはドアが容赦なく閉められてしまうため、降り遅れを防ぐための自衛策である。また、エレベーターに乗り込んできた人が、他の乗客に「アッサラーム・アレイクム（あなたの上に平安あれ）」と挨拶するのもよく見かける光景だ。自分は貴方に危害を加えませんよ、というのがこの挨拶の意図である。地下鉄の車両やエレベーターの中、こうした移動空間という束の間の「社会」においてさえ、人間関係を取り結ぶ昔からの知恵が生きている。

〔アタバ広場の今、昔〕

地下鉄はアタバ駅で降りた。友人の会社に行く前に、この近くにあった古い映画館の跡を訪ねたいと考えた。こちらに来て、「しばらく」とはとてもいえないほど長らく中断していた翻訳の仕事をまた始めている。社会学者サイイド・オウエイス博士〔1913-88年〕の自伝『私が背負った歴史』の翻訳である〔注 4〕。その訳注のひとつとして、エジプトの映画館の歴史を書いており、その大衆娯楽の中心地だった場所を確かめたいと思ったのである。

現在のエジプトでも、かつての日本と同様に、次々に映画館が閉館に追い込まれている。調べてみると 5 年前の記事だが、この 10 年で全国 24 県の 228 軒の映画館が閉館した、という（「ヨウム・サービウ」紙 2018 年 7 月 18 日記事）。カイロだけでも 61 館がなくなったそうだ。その一方で日本と同じく、郊外の大型商業施設などに新しい映画館ができているのだろう。

エジプト最初の映画館は、1896 年にアレキサンドリアのブルサ・トゥーソン・パシャという社交場が改装されたものであった。日本最初の映画館、浅草電気館（1903 年）より 7 年早い。その白亜の華麗な建物は現存し、文化センターとして使われている。当時は短編映画が中心であり、観客は外国人の居留民が中心だったようだ。

これに対して、オウエイス自伝に出てくるアタバ広場近くのオリンピア館は 1911 年に劇場から改装され、アラビア語字幕付きの映画が最初に上映された映画館である。つまりエジプト人の庶民向けの映画館の草分けだった。ノーベル文学賞受賞作家のナギーブ・マハフーズは、この映画館と同年に生まれたが、子どもの頃、父親に連れて来られたことがあるという。銀幕から列車が飛び出してくる迫力に思わず叫び声を上げた、と思い出を語っている。今回、オリンピア館を訪ねてみると、入り口が二つに仕切られ家電販売店として使われており、5 年前の新聞記事の写真よりさらに荒廃が進んでいた〔写真〕。前掲の



図8 オリンピア館の現在

記事を書いた記者が期待する映画館のリニューアルオープンは望み薄に思えた。オリンピック映画館があるアブデルアジーズ通りは、「カイロの秋葉原」とは言い過ぎだが、家電商品を売る庶民的商業地区となっている。そういえばこの通りに以前、来たのを思い出した。30 年ほど前になるか、エジプト小説翻訳家の故高野晶弘さんと一緒に、冷蔵庫を買いにきたことがあった。それは高野さんが当時寄宿していたアラビア語の達人のジャーナリスト、故鈴木登さんの住居の模様替えをしようと考えたからだった。

エズベキーヤ公園を含むアタバ地区は、かつて近代エジプトの文化の中心地だった。そのきっかけは 18 世紀末、ナポレオン率いるフランスの占領軍がここを宿営地を選んだことにある。スエズ運河開通の 1869 年に、こけら落としをした旧オペラハウスもこの地に建てられた。しかし、1971 年に火事に遭い、すぐ隣が中央消防署だったのだが、木造建築のためか全焼した。その後、跡地は無粋な立体駐車場になっている（1988 年に日本の援助でザマーレク地区に新オペラハウスが建設）。

アタバ広場地区には、かつて高級ホテルがいくつかあった。その代表がシェパード・ホテルだった。しかし、1952 年 7 月エジプト革命の発火点となった同年 1 月の反外国人暴動（黒い土曜日）で焼き討ちに遭って焼失した（同ホテルは、ナイル河畔に移転。2011 年革命後、現在は休業中）。この事件を境に、この地区の観光の中心地としての地位が傾きはじめたのかもしれない。ただし、長らく観光省の建物として使われていた旧コンチネンタル・ホテルが近年、立て壊され、再開発の波がようやく及んできそうな気配がある。

しかし、文化や観光の中心地としての地位が低下しても、このアタバ地区には依然、多くの人を引きつけるその独特の立地が持つ魔力があるように思う [注 5]。アタバ駅には地下鉄が二路線乗り入れているし、イスラーム旧市街の近代的市街どちらにも歩いていける。現在は、立体的なバスターミナルに変わってしまったが、1980 年代、すし詰めのバスから降りた広いアタバのバス停留場の、埃が立つだけではなく、血の沸き立つような喧騒風景が今も忘れられない。

[エジプトはギリシアの二の舞にはならない？]

今回は、経済の話をするつもりだった。昔話や寄り道ばかりしていて、ずいぶん紙数を費やしてしまった。紹介したいと思ったのは、前回と同様、ユーチューブ動画の話である。『エー・ヒカーヤ（どんな話だ）』というシリーズの「シーシー（大統領）は国際石油価格が下がっているのになぜガソリンの値段を上げようとするのか」という回に目が留まった (<https://www.youtube.com/watch?v=MEWDZzHi4Ic>)。出演は、アブデルラフマーン・オマル氏という人物で 35 万人ほどのフォロワーがいるらしい。この回は、字幕がついており、エジプト口語の経済解説として語学の勉強にもなる。

最近、ガソリン価格の 4 回にわたる引上げなどで、エネルギー価格の高騰が続いている。これに対する人々の不満に対応して作られた動画のようである。話は、2010 年以降のギリシアの経済危機から始まる。当時のギリシア政府は、この危機に際し IMF からの要求に

素直に従い、その過酷な条件に国民は苦しんだ。基本的行政サービスは民営化され、資本家も海外に逃避するなど経済はガタガタになった。しかし、2015 年以降の新政権は、IMF の要求を断固として拒否。中産階級と貧困層を保護し、公共部門を改革。輸出志向の工業化や中小企業支援などで経済危機を乗り越えた。おまけに、ヨーロッパで一番パレスチナ人を支援してるがギリシアだ、とまで付け加えて褒め上げる。

わがエジプト政府も同様に IMF の勧告に対しては冷静で合理的な対応をすべきだ（あるいはすでにしている？）という主張である。エジプトと IMF との関係の歴史は長い。1970 年代以降、累積債務に苦しんでいる状況からは信じられないが、第二次世界大戦直後のエジプトは IMF の理事国だったこともある（大戦中の連合軍＝英軍の駐留経費支払いによる対外債権の保有のため）。

ただ、最近の動きを簡単に述べれば、2020 年 3 月に始まるウクライナ危機（小麦の輸入危機）、23 年 10 月からのガザ・ジェノサイド（ホーシー派の「紅海危機」によるスエズ運河収入激減）という二つの荒波をかぶりながら、IMF の寛大な支援によりエジプトは、経済危機を何とか乗り切ることができたようだ。昨年 24 年 12 月、その経済改革に対して 4 回目の評価作業がなされ、12 億米ドルの追加融資が決まった。しかし、2022 年以降、IMF が求めてきた軍の経済への過度の介入（民間の経済活動の阻害）の見直しは今回、棚上げになったように見える。詳細は不明だが、エジプトは、これまでと同じく地域の危機に際して、その地政学的な立地条件をうまく利用したということなのだろう。

〔空き缶拾いと物売りの少女たち〕

このユーチューブ動画はスマートな仕上がりであり、その作成にはかなりのお金がかかっているように見える。しかし、あまりにスマートすぎて経済の現実の姿が見えてこない。動画の後半では、普通のエジプト市民の「実話」が紹介される。共働きの公務員で 5 人の子どもがいる若い夫婦は、世帯収入の月収 9000 エジプトポンド（2 万 7000 円）を倹約して使いながら、ペットボトルなどの回収で 500 エジプトポンドの副収入を得ているなど、という。しかし、実際に街を歩いてみて、ペットボトルや空き缶を拾い集めているのはどんな人たちであろう。それは普通のサラリーマンや主婦というよりは、大きなボロ袋を担いだ貧しそうな男たち、あるいは子どもである。

2011 年革命後のカイロの街中、革命の聖地タハリール広場近くから、当時泊まっていたアタバ広場近くの中級ホテルまで毎晩のように歩いた。あるとき古いが仕立てのよさそうなベストを着た老紳士が、ゴミ箱からアルミ缶を集めている姿を見かけ、革命の背景となる経済の問題を考えた。今回、街中を歩いてみると、目抜き通りで書き取りの復習をしながら、リップ（かぼちゃの種）を売っている少女を見かけた。革命の日々、物売りをしながらも街頭の灯りを頼りに勉強していた少女の姿を思い出す。まさにデジャヴだが 13 年も前なので、もちろん同じ少女ではない。

ところで紹介したユーチューブ番組では、なぜギリシアが経済危機に陥ったかについて

の説明はない。その危機の直接の原因は、隠蔽されてきた財政赤字が暴露されたからだ（2009 年 10 月）というのが定説である。しかし、2004 年開催のオリンピックのための過剰なインフラ建設の付けが回ったのだ、という指摘もある。先ほど述べた高速道路建設を始めとして、エジプトのインフラ建設への巨額な財政投入の極めつけは、「新行政首都」建設である。「エジプト・ヴィジョン 2030」の一環として構想され、現在の首都カイロ市から 45km 東に立地し、650 万人の居住が見込まれている豪華な都市のようだ。前回、述べたように「無風の国」であるから、賞賛、驚嘆の声は上がっても、表立って批判する政治勢力はいない。



図9 火炎樹(ホウオウボク)

注 1：このマダガスカル原産の火炎樹（ホウオウボク：花卉が鳳凰の形に似ているためか）、アルゼンチン原産のジャカラランダ、そして名前が紛らわしいが、西アフリカ原産の火焰木（カエンボク、別名「アフリカン・チューリップ」）を世界三大花木というらしい。

注 2：この故アティーヤ・セラフィー翁との思い出については、拙稿「真の労働者」とその母—近代エジプト労働の社会史の一断面」岩崎えり奈・岡戸真幸編『労働の理念と現実』（明石書店 2024 年）を参照。

注 3：現在、カイロの地下鉄は 3 路線、将来は 6 路線になる計画がある。期待されるのが、日本が援助して建設中の第 4 号線である。旧市街のイスラーム地区から、元カイロの前身都市のフスタートを経て、

ギーザの大ピラミッド、さらに大エジプト博物館（略称 GEM）までを結ぶ、観光ルートとしても期待できる路線である。ただし、工事による遺跡の破壊が心配である。最近はスラムクリアランスをしながらの再開発がお構いなしで進行しているからである。

注 4：「サイイド・オウエイヌ著『私が背負った歴史（ひとつの事例研究）』（『イスラム世界』46：1996 年、同第 1 巻（1985 年）の部分訳）

注 5：この魔性の立地を持つ広場で起きた婦女暴行「事件」を題材に取り、「アタバの娘事件を読む 現代エジプト社会における性の象徴性」『地域研究論集』3-2 号 2000 年（拙著『近代エジプト家族の社会史』東京大学出版会 2019 年所収）という論考を書いたことがある。